

①

二月 太陽曆ノ採用 太政官言
 改曆之儀ニ付、詔書寫並ニ曆法、別紙之通被仰出候、右ハ天地ノ正理に基き、萬世ノ大法創立被遊候厚御旨意ニ付、聊誤認なく遵奉可致事

詔書寫

朕惟フニ、我邦通行ノ曆タル、太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ、太陽ノ經度ニ合ス、故ニ二三年間、必ス閏月ヲ置カザルヲ得ズ、置閏ノ前後、時ニ季候ノ早晚アリ、終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル、殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ、率子妄誕無稽ニ屬シ、人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセズ、蓋シ太陽曆ハ、太陽ノ經度ニ從テ月ヲ立ツ、日子多少ノ異アリト雖モ、季候早晚ノ變カク、四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置キ、七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キズ、之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ、其便不便モ固リ論ヲ俟タザルナリ、依テ自今舊曆ヲ廢シ、太陽曆ヲ用ヒ、天下永世之ヲ遵行セシメン、百官有司、其レ斯旨ヲ體セヨ

明治五年壬申十一月九日

一 今般太陰曆ヲ廢シ、太陽曆御頒行相成候ニ付、來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事
 但、新曆鏤板出來次第、頒布候事

一 一ヶ年三百六十五日、十二ヶ月ニ分チ、四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事

一 時刻之儀、是迄晝夜長短ニ隨ヒ、十二時ニ相分チ候處、今後改テ時辰儀時刻晝夜平分二十四時ニ定メ、子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ、午前幾時ト稱シ、午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ、午後幾時ト稱候事
 一 時鐘之儀、來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但、是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱來候處、以後何時ト可稱事

一 諸祭典等、舊曆月日ヲ新曆月日ニ相當シ施行可致事

太陽曆 一年三百六十五日

閏年三百六十六日 四年毎ニ置之

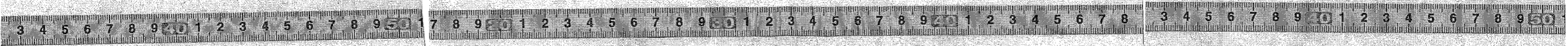
一月大三十一日	其一日	即舊曆 十二月三日
二月小二十八日	其一日	同癸酉正月四日
三月大三十一日	其一日	同
四月小三十日	其一日	同
五月大三十一日	其一日	同
六月小三十日	其一日	同
七月大三十一日	其一日	同
八月大三十一日	其一日	同
九月小三十日	其一日	同
十月大三十一日	其一日	同
十一月小三十日	其一日	同
十二月大三十一日	其一日	同

大小毎年替ルコトナシ

時刻表

後 午			前 午		
九時 戌半刻	十時 亥刻	十一時 亥半刻	十二時 午刻	八時 辰刻	九時 辰半刻
五時 申半刻	六時 酉刻	七時 酉半刻	四時 寅刻	五時 寅半刻	六時 卯刻
一時 午半刻	二時 未刻	三時 未半刻	零時 <small>即午</small> 子刻	一時 子半刻	二時 丑刻
				三時 丑半刻	四時 寅刻
				五時 寅半刻	六時 卯刻
				七時 卯半刻	八時 辰刻
				九時 辰半刻	十時 巳刻
				十一時 巳半刻	十二時 午刻

右之通被定候事



意あり時	意あり時
意あり時	十文字
意あり時	十文字
意あり時	十文字

八の時	八の時	七文字
七の時	七の時	六文字
六の時	六の時	五文字
五の時	五の時	四文字
四の時	四の時	三文字
三の時	三の時	二文字
二の時	二の時	一文字
夜九の時	夜九の時	十二文字
夜九の時	夜九の時	十二文字

九の時	九の時	七文字
八の時	八の時	六文字
七の時	七の時	五文字
六の時	六の時	四文字
五の時	五の時	三文字
四の時	四の時	二文字
三の時	三の時	一文字
夜九の時	夜九の時	十二文字
夜九の時	夜九の時	十二文字

府下從來元日、葵口を掩鎖し寂然曇
 眠すの風習、候處靡有祝日、斯る
 陰鬱の形容、甚以不都合之事ニ付來
 ル第一月一日より舊習相改相應儀
 式を裝以新年を祝し和樂相賑以可申
 事

申第四百五號

大阪府

壬申
 十一月 大阪府權知事渡邊昇

第百九號

第 號
 今般改曆ニ付人日上巳端午七夕重陽
 之五節を被廢
 神武天皇即位日
 天長節之兩日を以て自今祝日と被定
 候事

明治六年一月四日 太政官

明治六年第十八號

大阪府

右之通被
 仰出候間管内無洩相違るもの也
 明治六年一月十五日

大阪府參事藤村紫朗

書籍會社

御改曆ニ付而ハ過ル一月一日從前之
 元日ニ相當リ新年儀式等最早相濟候
 處新曆下段ニ舊曆書載セ有るを見誤
 リ當年ハ兩度の正月有之ふと相唱へ
 下ニ於而ハ年賀式再度取行ハ候心得
 之者間々有之由以外之事ニ候下段
 の舊曆ハ全く比較の爲り書加へ有之
 儀ニ付右等之間遺無之様此度可相心
 得事

明治六年第二十號

大阪府

右之趣管内無洩相違るもの也
 明治六年一月十九日
 大阪府參事藤村紫朗

第百九號

別紙之通被
 仰出候ニ付於當府以來一六の休暇
 相用候事
 右之趣管内無洩相違るもの也
 明治六年一月十五日

大阪府參事藤村紫朗

明治六年第十七號

大阪府

第二號
 自今休暇左之通被定候事
 一月一日ヨリ三日迄
 六月二十八日ヨリ三十日迄
 十二月二十九日ヨリ三十一日迄
 毎月休暇是迄ノ通
 但大ノ月三十一日ハ休暇ニ非ス

明治六年一月七日 太政官

書籍會社

17

二月 年末年始ノ執務 申出

當歳末御用取扱、當月廿九日限之事

一 御用始、明治六年第一月四日之事

一 同月六日より、平常之通御用取扱候事

但、臨時・非常・急訴等へ、假令休暇中たり共取扱候條、無遠慮可申出事

一 來る第一月一日朝第八時、市中正副總區長・用達並

市郡區長・開港用掛・前大年寄・米會所頭取、新年祝

賀として出頭可致事

一 同日朝第八時、非役士族之面々、且小學校教師同

斷出頭、尤名刺を以祝詞申述、退出可致事

一 同日朝第八時、市郡正副戸長同斷出頭可致事

一 同日郡中勸業用掛・酒造用掛・廻船用掛・醬油造用

掛・絞油用掛同斷

一 同日、百歳並に八十八歳に相成候高壽之もの同斷

但、當人難罷出者へ、名代可差出事

一 同日朝第八時、寺院住職之もの同斷出頭可致、尤名刺を以祝詞申述、退出可致事

來る第一月より一六日の休暇を廢し、日曜日休暇に相定め候事

8

九月 頭髮ニ關スル論達 申出

人之精神ハ、全く頭部ニ寓するものにして、所謂靈液の滙集する所なれば、鄭重愛護せずんばあるべからず、是を猛烈の日光・寒風に觸れば、種々の病源を醸し成す事ハ、諸方名醫の説く處なり、故ニ髮を措き帽を戴くの理ありて、自然毛髮の生育するも、頭腦を掩護する造化天付の要具たる、睫毛の眼睛を護するも同理たるべし、本邦往古ハ此理あるに依てや、惣髮の風俗なるハ、歴史ニ顯然たる處、後世次第二人の智識暗く成行、半髮の風俗と變し、冠りものをも用ひず、剃頭をして直ニ赫日・寒風ニさらす、何ぞ身を愛惜せざる陋習の甚しき、浩歎すべき事なり、今や事物の理明らか、日進開化の世に遭遇するもの、豈不明の陋習を墨守すべけんや、衆庶宜く此理を了解し、向後半髮を止め、身軀健康之覺悟可有之事

10

43 二月 散髮洋服は自由につき達

一 散髮洋服等可為勝手旨、去八月中ニ相達置候處、中ニハ官吏ニ相限り候様、心得違ノ者モ有之趣相聞、右ハ士農工商ノ差別ナク、一般差許ノ義ニ付、市中村々ニ於テモ散髮・ツボン・マントル等望ノ者ハ可為勝手間、此旨再應相達候者也

壬申二月 戸籍掛

「法令・市史・天満宮・矢野」

11

268 十一月九日 剃髮・結髮をやめ散髮にすべき旨の論達
凡人タルモノハ、壯健ナラスンハ何事モ尽力スル事能ハス、故ニ必ス先ツ其身ヲ愛顧スル事ヲ要ス、抑精神ハ全ク頭部ニ寓スルモノニシテ、所謂靈液ノ匯集スル処ナレハ、是ヲ猛烈ノ日光寒風ニ触レハ、種々ノ病源ヲ醸ス事、諸方名醫ノ説ク所ナリ、然ルニ我國ニ於テハ、中古半髮ノ風俗ト變シテ、冠リモノヲ用ヒス、剃髮シテ直ニ赤日寒風ニ晒ス事、豈身ヲ愛セサルノ甚シキナラスヤ、是ヲ以給髮散髮勝手次第ノ儀ハ、春來度々相達候得共、未タ此理ヲ了解スルニ至ラス、其理ヲ發明スルモノアリト雖モ、陋習ヲ確守シテ其実行レス、故ニ剃髮結髮ハ却テ頭部ノ蒸発氣ヲ支工、身体ノ害ヲナスモノ誰モ知ル所ナリ、依テ衆庶宜得此意、向後剃髮結髮ヲ相止可致散髮事

壬申十一月九日 堺県庁

「府史」

12

4 一月十三日 婦人の散髮および袴着用禁止につき論達 (区長)

先般男子結髮剃頭ノ儀御達ニ相成候處、婦人ノ内心得違致、或ハ散髮相成、袴等着シ歩行致候者俣有之哉ニ相見へ、以ノ外ノ事ニ候、自今女子タルモノハ女タルノ風躰致シ、右様ノ仕業無之様、御口達ニ而被仰出候間、於町々小前末々迄不都合無之様、為念可被申論候事

一月十三日

区長

「市史」

9

半髮ハ人身健康ニ害アルノ理ヲ去申

三百八號ヲ以布告セシメ速ニ斷裁可

爲致旨區長戸長エモ申付候處懇諭ノ旨

ニ基ギ散髮ノ風大ニ府下ニ行ヒ候折

柄猶舊習ヲ守株シ區戸長等撰ニ私意

ヲ以取扱候事杯ト申觸シ候族モ有之

趣以ノ外ノ事ニ候以來無用之疑ヲ生

セズ速ニ簡易ノ風ニ遷リ身上健全ヲ

明治六年第四十八號

大阪府

可保様可心掛事

右之趣管内無洩相達ルモノ也

明治六年二月十二日

大阪府權知事渡邊昇

一月八日 百姓町人ノ蝙蝠合羽等着用禁止

近來百姓・丁人之内・蝙蝠合羽又者フランケツトウ着用ニ而往來致し、帶刀人江相紛レ、且右ヲ着用致し、盜ミ致候者間々有之風聞ニ付、以後百姓・丁人等着用致候儀、屹度不相成候、若相背候者於有之ハ、咎可申付候

三月七日 百姓町人ノ蝙蝠合羽着用ノ許可

百姓町人之内、蝙蝠合羽着用不相成段、去年正月布令ニ及置候處、右者全ク改方ニ相紛候ニ付、相禁候得ども、當今取締相立候上者、勝手次第着用差免候

三月三日 違式註違條例 三三

違式註違條例、別冊之通相定、來ル明治十年二月二十日ヨリ致施行候條、違犯之者無之様、下々召遣之者ニ至ル迄懇切可申諭、此旨管内無洩相違候事

違式註違條例

第一條 違式ノ罪ヲ犯ス者ハ、七拾五錢ヨリ少ナカラズ、壹圓五拾錢ヨリ多カラザル贖金ヲ追徴ス
第二條 註違ノ罪ヲ犯ス者ハ、五錢ヨリ少ナカラズ、七拾錢ヨリ多カラザル贖金ヲ追徴ス
第三條 違式註違ノ罪ヲ犯シ無力ノ者ハ、實決スルコト左ノ如シ

一 違式懲役 八日ヨリ少ナカラズ 十五日ヨリ多カラズ
一 註違拘留 七日ヨリ少ナカラズ 十五日ヨリ多カラズ

但シ、拘留ノ罪ト雖モ適宜、懲役ニ換ユルコトアルベシ
第四條 違式並ニ註違ノ罪ニヨリ取上クベキ物品ハ、贖金ヲ科スルノ外、別ニ沒收ノ申渡ヲ爲スベシ
第五條 違式・註違ノ罪ヲ犯シ、人ノ損失ヲ蒙ラシムル時ハ、先ヅ其損失ニ當ル價金ヲ出サシメ、後ニ贖金ヲ命スベシ

第六條 違式ノ罪目ヲ犯スト雖モ情狀輕キ者ハ、減等シテ註違ノ贖金ヲ追徴シ、註違ノ罪目ヲ犯スト雖モ重キハ、加等シテ違式ノ贖金ヲ追徴スベシ、其犯ス處極メテ輕キハ止タ呵責シテ放免スルコトアルベシ
違式罪目

第一條 賈造ノ飲食物並腐敗ノ食物ヲ知テ販賣スル者
第二條 往來又ハ下水外河中等へ家作並孫庇等ヲ自在ニ張出シ、或ハ河岸地・除地等へ願ナク家作スル者
第三條 春晝及ビ其類ノ諸器物ヲ販賣スル者
第四條 病牛・死牛其他病死ノ禽獸ヲ知リテ販賣スル者
第五條 湯屋渡世ノモノ男女ヲ混浴セシムル者
第六條 猥リニ車馬ヲ疾驅シ行人ヲ觸倒ス者
但、殺傷スルハ此限ニアラズ
第七條 外國人ヲ無届ニテ止宿セシムル者
第八條 外國人ヲ私ニ雜居セシムル者
第九條 夜中無燈ノ馬車ヲ以テ通行スル者
第十條 人家稠密ノ場處ニ於テ妄リニ火技ヲ玩ブ者
第十一條 戲ニ往來ノ常燈臺ヲ破毀スル者
第十二條 馬及ビ車留ノ掲示アル道路橋梁ヲ犯シテ通行スル者
第十三條 男女相撲並蛇道ヒ、其他醜體ヲ見世物ニ出ス者
第十四條 川堀下水等へ土芥瓦礫等ヲ投シ流通ヲ妨グル者
第十五條 他人分ノ田水ハ勿論、組合持ノ田水ヲ斷ナク我田中へ引入ル者

第十六條 他人ノ持場ニ入り、笋或ハ茸類ヲ斷ナク採リ去ル者
第十七條 掘傍場ヲ汚損シ並ニ其圍ヲ破毀スル者
第十八條 堤ヲ壞チ又ハ斷ナク他人ノ田園ヲ掘リ耕耘ヲ妨ル者
第十九條 道敷内ニ菜蔬・豆類ヲ植、或ハ汚物ヲ積ミ往來ヲ妨グル者
第二十條 他邸又ハ他人持場ノ秣或ハ苗代草等ヲ斷ナク刈採ル者

第廿一條 馬夫或ハ日雇稼ノ者等仲間ヲ結ビ、他人ノ稼ヲ爲スニ故障スル者

第廿二條 神佛祭事ニ托シ人ニ妨害ヲ爲ス者

第廿三條 官有ノ山林等ニ禁制ノ榜示アルヲ犯セシ者

第廿四條 種痘規則ヲ遵守セザル者

第廿五條 官有或ハ他人ノ山林・田畠ニ入り植物ヲ損害スル者

第廿六條 乗船證書ヲ處持セズシテ外國船へ乗込シ者

第廿七條 乗船證書ヲ再用スル者

第廿八條 成規外ノ舟車駕籠ヲ用ユル者

第廿九條 堤防ニ接續スル外島ノ土ヲ願ナク掘鑿スル者

第三十條 無免許道路へ日覆ヲ張出シ往來ノ障礙ヲナス者

第卅一條 無願ニテ角力・芝居・狂言其他諸興行イタス者

第卅二條 無願ニテ社寺境内ヲ貸渡ス者

第卅三條 無願ニテ神佛開帳スル者

第卅四條 諸食物類へ有害ノ品用ユル者

第卅五條 毒藥並激烈氣物ヲ用ヒ魚鳥ヲ捕フ者

註違罪目

第一條 夜中無提灯ニテ諸車ヲ挽キ又ハ乘馬スル者
但、陸海軍ノ諸兵、非常ノ警戒アル時ハ勿論、平日隊伍ヲ組、夜陰行進及定制アル徽章ノ服帽着用ノ節ハ、單騎ト雖モ此限ニ非ズ
第二條 禽獸ノ死スル者或ハ汚穢ノ物ヲ往來等へ投棄スル者
第三條 往來又ハ店先等ニテ袒裼裸體スル者
第四條 下掃除ノ者、蓋ナキ糞桶ヲ以テ搬運スル者
第五條 止宿人並寄留人ヲ屈ケ出テサル者
第六條 往來筋ノ號札又ハ人家ノ番號・名札・看板等ヲ戲ニ破毀スル者
第七條 往來常燈ヲ戲ニ消滅スル者
第八條 危忽ニ依リ人ニ汚穢物及ビ石礫等ヲ抛擲セシ者
第九條 醉ニ乘シ又ハ戲ニ車馬往來ノ妨碍ヲナス者
第十條 養田水其外用水ニ妨害ヲナス者
第十一條 川筋ノ諸用杭ニ妨害ヲナス者
第十二條 他人ノ植籬・牆垣ヲ損害スル者
第十三條 渡船ニテ不當之賃錢ヲ取り或ハ賃錢ヲ不拂者
第十四條 橋杭・芥除杭等ニ舟筏ヲ繫グ者
第十五條 遊園及ビ路傍ノ花木ヲ折リ或ハ植物ヲ害スル者
第十六條 路上ニテ穴市ト唱フル類ノ所業ヲナス者
第十七條 街上ニテ瓦石等ヲ投ケ或ハ弓ヲ射ル者
第十八條 免許外ノ場處ニ於テ夜十二時ヲ過キ鳴物ヲ鳴シ人ノ安眠ヲ妨グル者

但、隣保ノ告ルヲ待テ處分ス
第十九條 市街便處ニ非ザル場所へ大小便ヲスル者
第二十條 賣ト又ハ辻占ト唱へ吉凶ヲトフ者
第廿一條 賭錢ヲ致サセ菓子類ヲ賣ル者
第廿二條 川中へ船並筏等ヲ繫キ他ノ通船ヲ妨ル者
第廿三條 人家稠密ノ場所ニ於テ牛豚等ヲ飼フ者
第廿四條 河豚ヲ賣買スル者
第廿五條 芝居・見世物無錢ニテ押テ見物スル者
第廿六條 出處不分明ノ者ヲ留置又ハ宿賃シ及ビ請判致シ雇入等ノ世話致ス者
第廿七條 車夫・馬子等賃錢ノ外別ニ酒代ヲ貪リ取ル者
第廿八條 川筋附洲へ樹木ヲ植へ又ハ川中へ船繫杭等ヲ建ル者
第廿九條 道路又ハ橋梁欄干等へ乾物ヲスル者
第三十條 濱側へ犬走リヲ設ケザル者
第卅一條 無願ニテ道路・橋上へ猥リニ出店致ス者
第卅二條 街路ニ於テ妄リニ焚火ヲナシ、又ハ山林・原野ニテ徒ラニ火ヲ焚者
第卅三條 行人ニ強テ車馬・駕籠等ヲ勸メ又ハ過言ヲ申掛ル者
第卅四條 他人ノ繫船ヲ無斷掉シ遊フ者
第卅五條 該區會議所又ハ事務所ヨリ呼出ヲ受、故ナク出頭セザル者